
見えなくてもいい

ネコガエル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見えなくてもいい

【Nコード】

N2766Y

【作者名】

ネコガエル

【あらすじ】

母親のいない高校一年生、カミヤシュウ神谷秀。

彼の思いとは？彼の過去には一体何があったのか？不思議な少女、矢代の正体は？

プロローグ（前書き）

これは、ちょっとした思いつきから出来た小説です。
誰か1人でも、「面白い!」と思ってくれたら嬉しいです。

ブローグ

僕には、お母さんがいない。

皆は、それを聞くと、「かわいそう」「大変だね」と言う。だけど、分らない。

皆は何故そんな事を言うのか。僕は何故そんな事を言われなければならぬのか。分らない。

僕は自分の事を「かわいそう」と思った事はない。「大変」と思った事もない。

何故なら、僕にはお母さんがいる生活が分からないから。だから、比べようがない。そんな事を言われてもピンとこない。

それに、寂しいと思った事もない。

だが、そう思えるようになったのは、あの日を境にしてからだ。でも、僕はその事を人には言わない。

どうせ、信じてもらえない。

そう思っていたからだ。

だけど、その日は違った。何故か、違った。

「絆だよ」

「ねえ、神谷君^{カミヤ}には、どうしてお母さんがいないの？」

帰り道、いきなり聞かれた。驚く。

「うおつ。……あ、矢代^{ヤシロ}か」

「何よそのオーバーなりアクションは」

矢代がムツとした顔で言う。

矢代とは部活が同じ。そのおかげで、仲良くなった女友達だ。

「ごめん。考え事してた」

「ふーん。……で、神谷君には、どうしてお母さんがいないの？」

「死んだ」

「いつ？」

「生まれてすぐ」

「寂しいって思った事ない？」

「今はない」

即答しながら、ふと思った。

何故僕は、矢代の質問に素直に正直に答えているのだろう。

いつもの僕なら、この類いの事は曖昧に笑っておく。そして適当に受け流すだけ。なのに。

分からない。

分からないけど、悪い気分じゃない。

矢代は、僕の話の聞いても哀れみの色を微塵も浮かべなかった。

「かわいそう」「大変だね」とも言わなかった。

ただ頷いて、納得して、また質問してくるだけ。

自然と素直に正直に、自分が思っている事が、口から滑り落ちていく。

不思議だった。とても不思議な感覚だった。

だが、悪い気分じゃない。

「どうして寂しくないの？」

「感じるから」

「何を？」

「お母さんを」

「靈感あるの？」

「ない」

矢代が訝しげに見てくる。

「どういう事？」

「僕は、漠然とだけれど感じられるだけ。靈感とは違うと思う」

矢代がさらに混乱した顔をする。

「それって靈感あるって言うんじゃないの？」

「僕は『お母さんが見守ってくれている』事が感じれるだけ。他の霊は感じられない」

矢代はそれで納得したようだ。じゃあ、と言う。

「じゃあ、強く繋がっているんだね」

「え？」

「絆だよ」

僕がポカンとする。

矢代が柔らかな笑みをうかべる。

「そんな事は、珍しいよ。だから、それが出来る程神谷君と神谷君のお母さんは強く繋がっているんだよ」

「そう……なのか？」

「そうだよ。そうに決まってる。……で、それって、いつから？」

「えっと……」

僕は、話し始めた。あの日の事を。

「絆だよ」（後書き）

この小説は、短編でもいい長さでした。ですが、気分的な理由で、連載にしました。

その結果が、これです。

この一話一話がめっちゃめっちゃ短い小説です。

もうすでに、後悔しています。

もうっ私の馬鹿何やってんだよーーーーーっ!!
という感じに。

こんな気まぐれ初心者な私ですが、一生懸命頑張って書くので、これからよろしくお願いします。

「幸せになつてね」

あの日、僕は友達の理恵のお見舞いに行った。

他の友達数人と、理恵のお母さんと一緒に。小2の頃の時だ。

そこは、僕の生まれた病院だった。そして、お母さんが死んだ病院でもあった。

自分のお母さんに「大丈夫？」と言われる理恵を見やる。その時、僕は思ってしまった。

いいなあ。僕にもお母さんがいたらなあ。

胸を締め付けられるような感じ。目の奥が熱くなる。溢れそうになる涙を必死にこらえる。

いつもの事だった。お母さんの事を考えると、いつもこつなる。

だが、今日はひどかった。いつもより、激しい。

何故だろう。

「大丈夫」と微笑む理恵が幸せそうだからだろうか。ここがお母さんが死んだ場所だからだろうか。

分からない。

日も暮れ始め、皆で帰る事になった。病室から出る。

その時、それは起こった。

「ひっ」

そこにいた女の子が引きつった声をあげた。ガクガクと震える。そのまま、へたり込んでしまう。腰が抜けたようだ。だが、その目はある一点を見据えたままだった。

その場にいた全員が、その方向を見る。

「ひいっ」

「きっ」

他の友達も、引きつった声をあげる。

「キヤーーーーー!!!」

「いやーーーーーっ」

「ギャーーーーー!!」

悲鳴をあげる。我先にと逃げ出していく。腰を抜かした子もいた。その子達も、顔を引きつらせた。這いつくばって逃げていく。

ただ、1人を除いて。

首をかしげる。僕は、その場所に立つたままだった。

振り返る。皆が恐怖に顔を歪めたその場所を、もう一度見やる。

だがまた、首をひねる。

そこには、何もなかった。

真っ白な病院の壁があるだけ。

だが、そう見えるのは僕だけらしい。

僕には、見えなかった。皆が顔を引きつらせたものが、見えなかった。

「ちっ血だらけの……おつ女の……女の人がつ」

向こうから、友達が誰かに説明している声が聞こえる。

だが、恐怖より好奇心の方が勝った。

手を伸ばす。皆が悲鳴をあげたその場所に向かって。

ふいに、手を掴まれた。

だがやはり、何も見えない。自分の手を掴んでいるものが、見えない。

だが、その手は優しかった。

だからだろう。僕は、悲鳴をあげなかった。

そのまま、誰かに抱きしめられるような感触。

だがやはり、何も見えない。

僕は、目を閉じた。その、柔らかな感触に、身をゆだねる。

怖いという感情は微塵も感じられなかった。むしろ、安心できた。

ホッとする。幸せな気分だった。

「お母さん……」

何の違和感もなく、言葉が唇からこぼれる。

「お母さん」

今度は、呼ぶ。

ずっと会いたかった人の名前を。ずっと抱きしめてほしかった人の名前を。ずっと会えないと思っていた人の名前を。

「なあに」

返事が返ってきた。柔らかな、慈愛に満ちた声。

もう、それだけで十分だった。それだけで、満ち足りた気分になった。

「秀^{シユウ}」

お母さんが、僕の名前を呼ぶ。

「幸せになってね」

「なんで？」

「秀が幸せだと、お母さんも幸せだから」

「じゃあ、ずっとそばにいてくれる？」

「そばにいらなくても、ずっとずっと、見守ってるよ」

「うん。分かった。じゃあ、僕幸せになる！」

頭を撫でられる。

「うん。幸せになってね」

その一言を最後に、お母さんは消えた。正確には、お母さんの感触がなくなった。

ゆっくりと目を開ける。

そこは、病院。お母さんどころか、誰もいない。

だが、僕は微笑んでいた。あの安心感がまだ、消えていなかった。

なんとなくだけど、お母さんがそばにいるのが分かる。

それ以来、僕は漠然とだけれど、お母さんの事を感じられるようになった。

「秀、ありがとう」

話し終える。フウツと息を吐く。

悪い気分じゃなかった。むしろ、すっきりとした、良い気分だった。ずっと秘めてきた事を話すのは、こんなにも良い気分になれる事だったんだ。

そう思った。だが、それは矢代のおかげだろう。

「そうだったんだ……」

ポツリと呟く彼女は、僕を哀れんではいなかった。ただ、納得していた。

沈黙。

だがそれは、息苦しくなるようなものではなかった。

2人とも、何かに満たされていた。その沈黙が、心地良いとさえ感じる。

僕は、ハタと気付いた。

あの日に、僕がお見舞いに行ったのは、理恵の所だった。

確かに、理恵だった。あの子の名前は、理恵だった。

ちらりと隣にいる少女を見る。

そして、この人の名前も、理恵。

矢代理恵。

ハツとする。

「矢代、お前もしかしてあの時の……」

「今気付いたの？」

矢代が拗ねたような声で言う。だが、その瞳は嬉しそうに輝いていた。

「私、ずっと気になってたの。あの日以来、神谷君は、まるで別人のように明るくなって、幸せそうに笑うようになった。……だから、あの日に一体何があったのか、知りたかったの」

矢代が、苦笑いと照れが混じった笑みをうかべる。

「でも、聞けなかった。聞いて、もし嫌われたらって思ったら、勇気が出なくて……。中学校別々になって、後悔した。高校は、部活も同じになれて、これが最後のチャンスじゃないかって、思っ…」

矢代が、笑う。

晴れやかな微笑み。底抜けに明るい笑顔。

それは、あの時の、昔の理恵の笑みだった。

「秀、ありがとう」

矢代が、僕を呼ぶ。

あの時の、昔の理恵の呼び方だった。

「話してくれて」

それは、まさに満ち足りた者の微笑みだった。

「理恵、ありがとう」

僕が、呼ぶ。

あの時の、昔の僕の呼び方だった。

矢代が、驚く。だが、それはすぐに柔らかな笑みに変わった。

「聞いてくれて」

矢代が、幸せそうに笑う。僕も笑った。

星が瞬く空の下、2人は一緒に返った。

歩きながら、僕は思う。

僕には、大切な人が1人増えたようです。これからも見守っていて下さい。

お母さん。

「秀、ありがとう」(後書き)

ここまで読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2766y/>

見えなくてもいい

2011年12月4日12時55分発行